

# 敦煌写本における偽写本の問題について

赤尾 栄慶

敦煌写本研究の上で二年前の二〇〇〇年六月二二日は、記念すべき日であった。この日は、王道士によって現在の敦煌藏経洞から大量の写本が発見されてちょうど一百周年目にあたるからである。これを記念して六月二二日から六月二四日の三日間にわたって、中国・北京の首都師範大学で「紀念敦煌藏経洞發現一百周年国際学術研究会」が開かれた。以下の小論は、その際に口頭発表した「FORGERIES OF DUNHUANG MANUSCRIPTS」の和訳に若干の手を入れ加筆したものである。

私は、敦煌写本発見百周年を迎え、ここ一七年くらいの間には顕在化した「偽写本」の問題について考えを述べることにしたい。

さて、世界に五〇〇〇〇点近くあるとされる敦煌写本の主な所蔵は、大英図書館に約一四〇〇〇点、パリ国立図書館に約七〇〇〇点、北京図書館（現、中国国家図書館）に約一五〇〇〇点、旧レーニングラード東洋学研究所に約一一〇〇〇点の世界四大コレクション合わせて約四七〇〇〇点、その他、日本国内に約一〇〇〇〇点などとなっている。

その中で、日本に所在する敦煌写本―そのほとんどが写経であるが―それらの九割以上が偽写本であるとの見解が、一九九八年七月に亡くなった藤枝晃京都大学名誉教授によって示されてきた。加えて北海道大学の石塚晴通教授や創価大学の池田温教授などによっても、中国・日本に所在する敦煌写本の中に偽写本が存在するという指摘がなされてきた。今、日本を中心とした一九八五（昭和六〇）年以降の偽写本をめぐる動向をまとめると次のようになる。

・一九八五（昭和六〇年）藤枝 晃「徳化李氏凡将閣珍藏」印について：本館所蔵の敦煌写本に捺されている李盛鐸の所蔵印が偽印であり、なお且つ、その印があるそれらの敦煌写本も偽写本であるという見解。『学叢』七号（京都国立博物館発行）

・一九八六（昭和六一年）一月二二日付、右記のことが『朝日新聞』の第一面に掲載される。

・一九八七（昭和六二年）七月一五日付『中外日報』石塚晴通「国際敦煌吐魯番学術会議」の報告記事：敦煌写経のうち、書写年代が新しい写本が存在するという報告。

・一九九〇（平成二年）池田 温 編著『中国古代写本識語集録』（東京大学東洋文化研究所発行）：採録した二六〇〇件余のうち、存疑の写本一〇六件について〈疑〉を附す。

・一九九二（平成四年）池田 温「敦煌漢文写本の価値―写本の真偽問題によせて―」一敦煌写本の価値―外形と内容、二敦煌写本の偽物、三敦煌写本の真偽鑑別の三項目から偽写本の問題を取り上げる。池田 温責任編集『講座敦煌5 敦煌漢文文献』（大東出版社）所収。

・一九九三（平成五年）九月二〇日付『中外日報』石塚晴通「第三十四回国際アジア北アフリカ研究会議」の報告記事：書写年代が新しい写本が存在するという報告。

・一九九六（平成八年）『京都国立博物館蔵品図版目録 書跡編 中国・朝鮮』：敦煌写本の中で、偽写本の可能性が高く、その書写年代について検討を要すると思われるものについては、時代や世紀を丸括弧で包む。

・一九九七（平成九年）六月三〇日―七月二日

The International Dunhuang Project の主催による「Forgeries of Dunhuang Manuscripts in the Early Twentieth Century」というワークショップが大英図書館東洋写本部で開催される…スタインコレクション第三次分に偽写本が存在するという発表。

・一九九七（平成九年）七月四日 『毎日新聞』夕刊に右記のことが掲載される。

・二〇〇〇（平成十二年）六月二二日―六月二四日 中国・北京の首都師範大学で「紀念敦煌藏経洞發現一百周年国際学術研究会」が開催される。

・二〇〇一（平成十三年）五月 右記研究会の論文集『敦煌文献論集―紀念敦煌藏経洞發現一百周年国際学術研究会論文集』（遼寧人民出版社発行）が刊行される。

・二〇〇二（平成一四年）The International Dunhuang Project が主催した一九九七年のワークショップの報告書が『The British Library Studies in Conservation Science 3 Dunhuang Manuscript Forgeries』として刊行される。

まず最初に敦煌写本に偽写本ありとする藤枝説は、まさに卓見であると云わなければならず、私自身も基本的には藤枝説を尊重している。また『学叢』七号に「特別寄稿論文」として掲載された藤枝論文「徳化李氏凡将閣珍藏」印については、現在でも中国から出版される敦煌写本関係の図書にしばしば参考文献として紹介されており、ある意味で「敦煌写本に偽写本あり」という見解を初めて公の形にしたものといえよう。続いて一九八七（昭和六二年）の「国際敦煌吐魯番学術会議」と一九九三（平成五年）の「第三十四回国際アジア北アフリカ研究会議」の二度にわたる石塚晴通北海道大学教授の報告は、藤枝説を追認しつつ、中国国内における偽写本の存在に言及したものであり、偽写本の問題が日本だけでなく、中国においても存在することを指摘したものであった。

このような流れのなかで、一九九〇（平成二）年に出版された池田温編著の『中国古代写本識語集録』が存疑の写本一〇六件について〈疑〉を附したことは、このような偽写本認知への流れを確かなものにしたと云ってよい。次いで、一九九六（平成八）年に当館が出版した『京都国立博物館蔵品図版目録 書跡編 中国・朝鮮』に

においても、敦煌写本の書写年代に関して検討を要すると思われるものについては、その書写時代を丸括弧で包むという表現をとった。残念ながら、京都国立博物館所蔵の九〇巻余りの伝敦煌写本のうち、八割五分以上は偽写本と見られるが、このような当館の姿勢は学界においても高い評価を得ている。

敦煌写本の書誌学的研究の上で画期的な出来事となったのが、先述したように一九九七年六月三〇日から七月二日にかけて、The International Dunhuang Project の主催で大英図書館東洋写本部において開催された「Forgeries of Dunhuang Manuscripts in the Early Twentieth Century」というワークショップであった。このワークショップでは、藤枝晃京都大学名誉教授の問題提起に基づいて、英国・フランス・ロシア・中国・日本などの関係する研究者達が敦煌の偽写本について初めて公の席で発表・討論を行ったものである。これによって、中国・日本に所在する相当数の敦煌写本が偽写本であるという可能性が高いという藤枝説が追認されたが、加えて敦煌写本の世界二大コレクションの一つであるスタインコレクションの第三次探検分にも偽写本が多数存在するという発表には衝撃が走った。これによって、大英図書館も偽写本については他人事ではなくなったわけである。

一般に敦煌写本、ことに写経の類は、同一のグループや時代によって一紙の大きさや一紙に書写される行数などの書写の形式に規則性が認められるものが多い。このような形態的観点については、既に一九八一年にフランスのドレジュ博士の論考 (Professor Jean-Pierre Drege of Ecole Pratique des hautes études "Papiers de Dunhuang: Essai d'Analyse Morphologique des Manuscrits Chinois Dates" (pp.305-360)

In Tsung Pao, vol. LXVII, 1981.) があるが、私も一九九六(平成八)年から三年間にわたって、スタインコレクション・ペリオコレクション・北京図書館の敦煌写本に関して、関連機関と研究者の協力を得ながら、書法と料紙及び書写の形式という形態的観点を中心とした敦煌写本の書誌学調査を実施し、一九九九(平成一一)年三月にそれらを『敦煌写本の書法と料紙に関する調査研究』という報告書にまとめ、そのなかでは「敦煌写本の料紙と書写の形式について」という論文を書いた。偽写本に於いても一紙の大きさや一紙に書写される行数などの書写の形式が忠実に複製されているものも多く、たとえ、これら書写の形式に破綻がなくても、明らかに料紙の風合いや書風が当時のものと認められない写本がかなり存在する。

偽写本と判定される主な根拠は、①料紙の風合いの相違、②字体の破綻、③書法・書風の破綻、④触感の相違、などが挙げられる。もちろん、このような観察眼は、第三次分を除くスタインやペリオのコレクションを数多く実見して調査し、トレーニングすることによって養われるものである。

ここで偽写本の具体的な例として、当館に所蔵される『小品般若経(摩訶般若波羅蜜経)』巻第八の写本を取り上げることにする。この写本は、北魏の永平年間(五〇八―五一二)から延昌年間(五一二―五一五)にかけて、令狐崇哲が典経師を務めて敦煌鎮で組織的に書写された一連の「敦煌鎮写経」に見られる奥書を有している。その奥書には、

「延昌三年歲次甲午七月廿二日燉煌鎮經

生曹法寿所写経成訖

用帑廿六張

とあり、写経生曹法寿が書写し、料紙は二六枚を使ったことなどが記され、「用帛廿六張」の下には黒印も捺されている。

この当館所蔵本のデータを詳しく報告しよう。現状では巻首が欠損しており、二一紙分が残存している。本紙の縦は二六・二cm、一紙の平均的な長さは約三六・八cmで、一紙に書写されている行数は二二行、紙色は濃い黄蘗色をしている。行を分ける界線がほとんど無界かと思われるようになっており、紙継ぎ近くの天地の横界には針で開けたような穴も見られる。

これらの料紙の規格や書写の形式に関しては、スタインコレクションやペリオコレクション中の「敦煌鎮写経」とほぼ同じで破綻はないが、料紙の風合いや手触り、そして筆致から見ても偽写本と断定される。ことに写経生曹法寿の筆致は、同じく「敦煌鎮写経」のうちの永平四年（五一）の『成実論』巻第十四（S一四二七）と比較することによって、別筆であることが明らかとなる。

この当館所蔵本については、藤枝説は云うに及ばず、池田温編著の『中国古代写本識語集録』にも〈疑〉との指摘がある。更に興味深いことには、この写本と同一の『大品般若経（摩訶般若波羅蜜経）』巻第八が北京図書館にも存在することである。もちろん、奥書も同一となっているが、北京図書館所蔵本については、全体一九紙のうち、尾題と奥書がある末尾一紙のみが『大品経』巻第八に相当しており、他の一八紙は『法華経』の経文かと思われる。末尾の一紙に關しても筆致や料紙から見て偽写本と判断される。

同じく同一の写本が存在する例としては、高昌国延寿十四年（六

三七）大僧平事沙門法煥の題記を有する『維摩経』巻下が挙げられる。一本はスタインコレクション中のS二八三八、他の一本は日本の天理図書館の所蔵になるもので、両本を実見した結果もやはり『中国古代写本識語集録』に指摘があるように、天理図書館本の方が偽写本と判断される。

これらは、いずれも二〇世紀初頭に書写された偽写本というわけである。一九一〇年に清朝政府が敦煌莫高窟に残っていた敦煌写本を北京に移送した後も、大谷探検隊やスタイン探検隊（いずれも第三次隊）が敦煌で写本を入手していることから、第三次分のスタインコレクションや大谷探検隊分は云うに及ばず、その他に中国・日本に所在する敦煌写本を書道史などの分野から使用しようとする場合には特に注意を払う必要がある。現在、中国から『敦煌吐魯番文献集成』や『中国国家図書館蔵敦煌遺書』などが陸續と出版されていることから、これらの文献を利用しようとする研究者にも今一度注意を喚起したい。もちろん、偽写本といっても、いわゆる写経のようにならざるに満ちたものがある反面、明らかに創作不能と思われるような注釈書類などもあり、注釈書類などは今後とも内容を検討する必要がある。

次に偽写本ではないが、唐時代の転写本と考えられる一例を紹介することにしたい。それは、日本の唐招提寺に所蔵される伝敦煌写経のうち、貞観十五年（六四一）四月八日の奥書がある『金剛般若経』である。

この一卷は、その奥書より、亡き両親の追福のために釈慈忍と兄陳世徹が発願書写せしめた『金剛般若経』百巻のうちの一巻であると知られるが、問題はその書写年代である。奥書によれば、貞観十

五年の書写のように思われるが、実際には紙を漉いた時の簀目が不鮮明で、もやもやとした感じに見える料紙が使用されていることや書体などを詳しく検討した結果、その書写年代は奥書にある貞観十五年よりほぼ半世紀後の七世紀最末期から八世紀ごく初期の書写であることが判明した。これは、明らかに転写本であるという貴重な遺例と思われる。もちろん、この写本には、「冥司偈」と呼ばれ、靈幽法師が長慶二年（八二二）に菩提流支訳から取ったとされる「爾時慧命須菩提」から「是名衆生」までの六十字の経文も存在しない。

また敦煌写本の多くはあまり状態がよくないことから、今後これら写本の保存・修復が必要となっている。当然のことながら、敦煌写本を修理する場合に費やされる時間・経費・労力などは、やはり偽写本ではなく、確かな写本に費やされるべきであろう。偽写本の問題は、今後の保存・修理にとっても重要な問題となることも合わせて指摘しておきたい。

最後に自らが所属する機関に偽写本が存在することを公に認めることは、大変残念なことではあるが、事実を事実として認識し、開かれた写本研究を学際的に行っていくことが今後の敦煌写本研究の基礎となると思う。